

「この病が流行る前から」



「弥陀の本願を信ぜずしては、ふつとたすかるといふ事あるべからず」

(蓮如上人／『御文』五帖目第二通)

この病が流行る前から私は「凡夫」であった。しかしこうなってみて初めて、その「凡夫」という言葉の本当の意味を知った気がする。不安に慄き、希望と絶望に翻弄され、暮れていく一日に感謝をしたり或いは呪ってみたり、全く落ち着くところがない。狭い檻の中をウロウロと歩き回る獣のごとき毎日である。

願いが叶うなら、病が流行る前の平和な日常を望むだろう。しかし、そう簡単に叶わないことも理解している。理解はするが、やはり願う。安寧や幸福を願うのは人間の自然な姿だ。

それを「祈願」というのだろう。

一方、真宗に「本願」という言葉がある。これは簡単にいえば仏様の願いで、阿弥陀仏の本願は「念仏する人を浄土にすくい取る」ことを内容とする。それは私の願いと違う。私が願うことは主に目の前の問題の解決と欲望の成就だからだ。浄土へ往こうなどと思わない。でも、私にとって奇妙にも思えるその仏様の願いでしか、私が本当に救われることはない、蓮如上人は説かれる(右記)。

私の願いは私の欲から生まれる。自身が凡夫であることを差し置いて、目の前の問題の解決ばかりを望む。しかし本願は、そんな「私」こそが課題である、と教える。自分のおそれに傷つき、時に他者も傷つけ、上手くいけば増長し、困り果てれば世界と人生を呪い始める。そんな私に向けて「本当の願い」が差し向けられているのだ。

生まれてこの方ずっと私は凡夫であり、しかし凡夫であるがゆえに実は本願の目当てとされてきた。気づこうとしないだけで、聞こうとしないだけで、ずっと照らされ、ずっと願われていたのだ。今この瞬間も変わらない。本願は私と共にある。私のためにある。そう、この病が流行る前から。